

## ベールを脱いだ Windows 10、法人ユーザーの移行促進を狙う

「当社にとって最も重要なリリースの一つ」。米マイクロソフトのサティア・ナデラ CEO(最高経営責任者)は日本の開発者向けイベントで、次期 Windows である「Windows 10」に対する意気込みを訴えた。



### 写真 1 ● Windows 10 の技術プレビュー版

同社が 2014 年 9 月 30 日(米国時間、以下同じ)に発表した Windows 10(開発コード名は「Threshold」)は、現行の Windows 8/8.1 の後継となる OS である。PC やタブレット、スマートフォンなどで一貫した作業を支援するほか、法人ユーザーを意識してマウスとキーボードでの操作性を改善した。Windows 7 以前で OS の更新が止まっている法人ユーザーを、最新の OS へと移行しやすくする狙いがあるとみられる。

正式版のリリースは 2015 年後半になる予定だ。10 月 1 日には開発途中の技術プレビュー版の配布を開始した。

### スタートメニューが復活

Windows 10 は PC、タブレット、スマートフォンに加えて、画面サイズが 4 インチから 80 インチまでの機器や、IoT(モノのインターネット)関連機器まで幅広くサポートする。

ナデラ CEO は「Windows 10 は一貫性のある作業を支援する」と語り、一つのアプリであらゆる機器に対応可能な「ユニバーサルアプリ」の概念を採用している点が最も重要であるとした。例えば、ノート PC で実施していた作業を中断した後、移動中にスマホで同じアプリを開くと、スマホの画面に合わせた表示で、中断した作業を継続できる。法人ユーザーは「個人が持つ機器を含め、全てのデバイスで一貫した管理やセキュリティを実現できる」と、ナデラ CEO は強調した。

Windows 7 以前にあったスタートメニューを復活させたのも大きな特徴だ。タッチ操作に適した Windows 8/8.1 のスタート画面専用アプリ「Windows ストアアプリ」も表示できる。ストアアプリはデスクトップ画面で起動・表示でき、8/8.1 のようにストアアプリを起動するたびに全画面表示に切り替わることはなくなる。

法人ユーザーは、慣れ親しんだマウスとキーボードの利用が中心となるデスクトップ画面で、ストアアプリの利便性を取り込みながら全ての作業を完結できる。

Windows 7 以前の法人ユーザーは Windows 10 の登場により、次期 OS への移行の選択肢を一つに絞りやすくなった。どこまで移行が進むかは、現在利用している業務アプリや周辺機器の互換性が決め手になる。

Windows 10 の発表前には、一部メディアで「次期 Windows は 8/8.1 ユーザーに対して無償で提供される」との憶測が流れた。この点について、米マイクロソフトは特に言及しておらず、日本マイクロソフトは「全く決まっていない」としている。

マイクロソフトは 2015 年前半に、Windows 10 の一般消費者や PC 以外の機器向けの機能について明らかにする予定だ。ここではタッチ機能の強化などが見込まれる。